



人には迷子になる時間が必要だ。

企業経営漫談士 岡野実空

忙しい世の中で、仕事ばかりか、私生活にも求められるようになった、「計画性」。皮肉なことに、だからこそ逆に高まる、「無計画」に過ごす時間の必要性。これはその確保を呼びかけた、近畿日本鉄道（以下、近鉄）の広告コピーです。

（1983、竹内基臣）
今回は、その意義や効用について考えます。

視点1：背景と真意

先のコラム(C-15)で取り上げた、関西私鉄の雄、近畿日本鉄道。その魅力は、私鉄日本一の長さを誇る沿線に点在する、バラエティー豊かな名所旧跡です。修学旅行の定番のような場所はさて置き、祖先の息吹を体感しながら、「そぞろ歩き」できる場の多彩さで、近鉄は他の追随を許しません。

さてこのコピーは、忙しい現代人に、そんな場所をふらりと訪ね、意識的に「迷子」になることの効用を訴えたもの。すなわち、自ら「時間」を生み出し、未知の「空間」に身を置いて、さまざまな気づきを得たり、内省したりすることの効用です。

それは、「Oh!モーレツ」(丸善石油、1969)な経済成長から二度のオイルショックを経て、私たちがこれからどんな方向に進むべきか？と考えていた時期の広告。しかしこの呼びかけ空しく、多くの人は「迷子」になることを嫌い、それまでの「日本列島改造」路線の延長に乗ってしまいました。

視点2：教訓と学習

しばしば「旅」に喩えられる、私たちの人生。「迷子」とは、その途中で「方向性」を見失った状態。このコピーの意味するのは、人生に付き物の悩める時期だけでなく、ときどきは「意図的」に迷子になることの効用です。

それはまず時間を作り、「非日常」の空間に身を置くことから始まります。またそれが未知の場所であれば、多くの予期せぬ発見や出会いがあり、そこから「日常」の課題を解くヒントが得られることもしばしばです。そこに「計画」はご法度。それこそ、「そぞろ歩き」の醍醐味といえます。

しかし少子化で、「可愛い子には旅をさせよ」を体感しない

◆教訓：人生に必要なものは、「勇気」と「想像力」と「少々のおカネ」だ。(チャールズ・チャップリン)

◆参照コラム：『三々な経営』
E-2 「ワークライフ・バランス」の意義
E-6 「ライフシフト」の必要条件③

まま、エスカレーターに乗って社会に出た大人が激増したいま、改めてその意義を確認したいもの。日常行き詰まりを感じたら、躊躇なくその環境に身を置く習慣を身に付けましょう。

文明の利器によって、やたら便利になった現在。皮肉なことに私たちはその奴隷となって、あくせくと働いています。しかしそれを上手く使い、時間は生み出せます。「忙」しさの中、「心」を「亡」くすことがないよう、直ちに行動を起こしましょう。

まずはスマホのスイッチを切って、、、

視点3：異論その他

物理学者にして名随筆家だった寺田寅彦が、頭のいい人は、誰も行けないところにいち早く行きつけるが、途中の道端に落ちている大切なものを見落とす、との言葉を残しています。凡人こそ、スピードを競うことなく、横道に逸れても路傍の草木に心を遣る観察力が必要です。

旧国鉄が民営化する際に手本としたのが、経営の多角化で非採算路線を守る近鉄の経営手法。その路線網には数々の聖地が点在しており、急がず人生を見つめる旅を推奨する戦略もお見事です。

さて、「四十にして惑わず」は孔子の言葉。しかし人生100年時代、惑っても迷っても焦ることはありません。もっとも古稀過ぎの私が迷うと徘徊と言われますが…。(一力廉)

ビジネスで「迷子」にならないための一番安直な道は、国や自治体、大企業の下請けになること。しかしいま、その施主自身が迷子に。それに頼らず、自ら「時間」を作り、率先して「迷子」になって、それぞれが新たな「道」を探し出しましょう。

2020年12月7日 実空